

道徳だより

研究部ver.

テーマ：「めあて」にこだわる



京都市道徳教育研究会
会長 近藤 清美
研究部副部長 岸本 知可

道徳科における「納得解」形成を目指した授業作りとは～「めあて」にこだわる～



1: 「自分事」として道徳的課題を考えることと「納得解」

これからの時代を生き抜いていく子どもたちには、自分の内面的な問題や、自分は何を大事にしたいのか、どのように生きていきたいのか、という問題を語り合う学習がこれまで以上に必要ではないかと考えられます。道徳科は、自己の生き方を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した人間として他者と共によりよく生きるための基盤となる道徳性を養うことを目標としています。そのためには、様々な問題に正面から向き合い、「自分事」としてとらえ、自分の価値観を形成することが重要になります。自分の価値観を形成していく上で、道徳的価値の重要性を理解すること、すなわち正しい「知識理解」を獲得すること（共通解）は大切ですが、それは道徳科がめざすゴールではないと考えます。

自分というフィルターを通して、「自分事」として試行錯誤を経て得られた自分なりの結論こそが、「納得解」であり、私たちが子どもたちに道徳的課題を通して培っていきたい力ではないでしょうか。そのためには、自分だったらどうするだろう、友だちはどう考えるのだろう、といった「自分事」として思考を深めることを大切にした授業展開の工夫が必要と考えられるのです。

2: 児童が問題意識をもつ「めあて」とは

道徳科において「めあて」は、子どもたちの思考のスタートであり、1時間の授業を貫き支える一本の大黒柱のようなものです。教材を通して、自分との関わりで道徳的価値に向き合う時も（展開前段）、教材から離れて自分自身や自分の生活を振り返って考える時も（展開後段）、けっしてぶれることのない「めあて」にこだわりたいものです。



主題名：思いやる心	内容項目：B 親切・思いやり	出典：日本文教出版 生きる力4
教材名	ええことするのはええもんや	
学習のねらい	相手の身になって考える大切さに気づき、困っている人に対して、思いやりの気持ちをもつて接しようとする心情を育てる。	

この主題・内容項目を例に自分の学級の児童ならどのような「めあて」がいいのか、考えてみませんか。

例えば、(1) 親切にすることについて 考えよう。

(2) 人に親切にする よさはなんだろう。

(3) なぜ人に 親切にするのだろう。

(4) なんのために 人に親切にするのだろう。



どのような「めあて」を提示したら、目の前の子どもたちの思考回路が一気に解き放たれ、かけめぐり始めるのでしょうか。「人に親切にする」という道徳的価値は、子どもたちは小さい頃から親や周りの大人に言われ続けて、すでに共通解として内在化されているはずですが、重要なのは、「自分自身がどのような経験をして、その時どう感じたのか」や「友達はどうの経験があり、その時どう思ったのか」といったように、自分の経験を通して考えなくなったり、お隣の友達の話聞きなくなったりすることだと思ふのです。そんな「めあて」を教師と子どもたちが共有できたとき、授業のわくわく感が最高潮となると思ふます。

3:児童に気付かせたいこと・到達させたいことはなにか

道徳の1時間の授業で児童に気付かせたい、到達させたい思いや考えはなにか。その着地点を明確にするための「めあて」を確実に教師がもつことを意識したいものです。きっとそれは「親切は大切だ」という共通解の確認ではないはずです。児童それぞれが「自分事」としてその道徳的価値を捉え、「ぼくが、親切にされた経験、その時感じたこと」に気づき、「友達が親切にされた経験、その時感じたこと」を知り、共有化していくことで、「ほめられたいから親切にしていたわけじゃないんだ」や「困っていたとき人に救われたから私もそんな優しい人になりたい」、「お互いに親切にしあうってすてきな」などといった形成された道徳的価値観を基盤として自己の生き方についての考えが深まると考えられるのです。それぞれの子どもが表現したくなるような、そして、友だちの考えを聞いて、なるほどそんな考えもあるのか、と豊かに相互作用し高めあえる1時間にしたいものです。



4:チームで道徳に向かう ―通級指導教室との連携―

『学習指導要領解説 道徳編』(2017)の第3節指導の配慮事項には、他の教職員とのチーム・ティーチングなどの協力的な指導の工夫を挙げています。評価のための具体的な工夫点においても、「複数の教師が協力的に授業を行うとすれば、学級担任は普段の授業とは違う角度から児童の新たな一面を発見することができ、児童の学習状況や道徳性に係る成長の様子をより多面的・多角的に把握することができる」といった評価の改善の観点からも有効である」とあります。通常の学級には、多様な子どもたちが在籍しています。発達障害等のある児童に対して道徳科の指導や評価を行う上では、それぞれの「困難さの状態」を把握した上での配慮が必要となります。例えば、通常の学級(在籍学級)で道徳科の授業を受けた児童の「振り返り」の文章を活用して、通級指導教室担当の教師が、個別に道徳的価値について対話を行ったことが、児童が「自分事」として考える契機となったという事例があります。個別に対話をすることで、道徳的価値に対する児童の思考の流れを明らかにしていくことにつながり、その児童自身の「納得解」へと導くことの可能性を見出すこともできるのです。



5:おわりに

義務教育9年間の道徳的発達、子どもたちの生涯発達にも影響を与えるものでしょう。子どもたち一人ひとりの自分なりの道徳的価値観＝納得解を培うこと、そのための基盤となる道徳科の授業は、子どもたちと教師とが協働し創りあげる、大切にしたい時間です。

参考・引用文献

岸本知可・相澤雅文(2020) 自閉スペクトラム症児が道徳的課題を「自分事」としてとらえる試み―在籍学級と通級指導教室との連携を通して―

田沼茂紀(2017) 実効性ある道徳科を具現化するためのアクティブ・ラーニング導入とその可能性―課題探求型道徳科授業の提案とその方途としてのパッケージ型ユニット―

永田繁雄(2016) 特別支援教育における道徳教育の充実にむけて―NO.61 特別支援教育特集 p14～17

文部科学省(2017) 小学校学習指導要領 解説 特別の教科 道徳

文部科学省(2018) 障害に応じた通級による指導の手引 解説とQ&A 改訂第3版